

世界の難民情報を伝える

UNHCR NEWS

United Nations High Commissioner for Refugees

Number

3

MAY 1997



Contents

Special Report

援助の現場で活躍する
UNHCR 日本人職員

Update

世界各地の難民状況

Campaign Report/Information

東海銀行の社会貢献活動
ジャパントイムズの募金キャンペーン
日本財団から100万ドルの寄付
毎日新聞、読者からの寄付を難民支援に
ボーイスカウト、難民支援を開始

In the Media

寄稿 難民救済に欠かせぬ地雷の除去



UNHCR

国連難民高等弁務官駐日事務所

援助の現場で活躍する UNHCR日本人職員

夜空を見ながらシャワーを
米川正子 UNHCR ルワンダ

私はこの2か月間、休みなしに働くはめになり、少々まいっていますが、元気しております。世界的に報道されたように、96年10月、東ザイールの紛争を契機に、ザイール、続いてタンザニアにいたルワンダ難民の大半(合計約150万人)が大量にルワンダに帰還し、難民の自発的帰還を目的とする我われUNHCRの職員も、その受け入れて走り回っていました。

1日に1万から20万の人々が帰還したため、約200台のトラックでは全員の輸送はできない。病人や妊婦、高齢者など以外は、隣国の難民キャンプからルワンダの故郷まで行進せざるえませんでした。人によっては、子供を背負いながら、10~20kgの荷物を頭にのせ、200~300kmの道のりを数日間かけて歩くわけで、彼らのエネルギーにはいつもびっくりさせられます。

UNHCRとNGOのスタッフは、帰還民が無事に自分の故郷に帰れるよう、可能な限りの輸送、食糧(路上でのビスケット配給)、水と医療(道端に給水所・保健所の設置)の確保、そして親と離れ離れになった子供たちを介護し、親たちの追跡をするといった作業に追われました。以前、私がタンザニアで活動していた時に知り合った難民に再会し、母国に帰還できた喜びを分かち合ったものです。

その一方で、行進中の帰還民が、

急スピードで走る車にひかれて亡くなる事故などが絶えない。その後始末で怒りや悲しみ、ストレスがたまりましたが、緊急援助のあり方を随分と学ばされた刺激的な毎日でした。

難民帰還が終わってホッする間もなく、次には定着という大問題が待っています。ルワンダ国内で活動する日本のNGOと日本人スタッフの数が増え、日本政府もこの国への人道援助に力をいれているようですが、今後どんな活動を展開するのでしょうか。

過去4年間半、私は国連ボランティア(UNV)として6か国で活動してきましたが、昨年10月からUNHCRの職員となり、今年10月までルワンダで働く予定です。フィールドの仕事は相変わらず面白いのですが、私の任地は、孤立した何もない所です。

私生活の様子を語ると、高床式の小屋に住み、天井がないシャワー室では、夜空を見ながらシャワーを浴びています。もちろん大雨が降れば、浴びられない。最近、事務所に電話が設置され、スタッフの皆で喜んだが、その電話もほとんど機能しない。テレビも新聞もなく、外からの情報はラジオを頼るしかありません。

日本の皆様からの手紙を受け取った時の喜びは格別です。今年も励ましの手紙を楽しみにしております。

[1997年1月]

いま、UNHCRでは、全世界119か国239か所の事務所に5411人の職員が活動している(97年2月現在)。この中で、日本人職員の数は、56人。うち、35人が難民援助の現場で働いている。その大半が、アフリカ、アジアなどの第三世界の国々だ。こうした厳しい環境で日々、奮闘する日本人UNHCR職員の仕事ぶり暮らしを、彼らの手紙から紹介したい。

現場では毎日が新しい発見

織田靖子 UNHCR モザンビーク

UNHCRの数ある仕事の中で、現場、それも難民や帰還民の人たちが実際にいる現場で働く機会というのはある程度限られています。国連機関の中でも、現場に事務所を開設して職員を常駐させるのは予算の限りがあり、そんな中でUNHCRは特に現場の存在に力を入れている所です。

私がモザンビークで働いていた5か所の事務所のうちどこでも、UNHCRが最大の国連機関でした。最大といっても5か所のうち3か所はWFPとUNHCRのみ、あとの2か所はUNHCRしか存在しませんでした。

UNHCRの現場職員は、1年から2年くらい1か所に住んで仕事をしてゆく事が多い。私の場合は3か月位で代わりたいがしほれ、6か月後にはほぼ実戦に入れて、最後の一年間位はそのまま実戦をつづけるという感じです。

UNHCRは現地職員を多く採用しています。モザンビーク人の同僚の一人が娘に“ヤスコ”という名前をつけてくれましたが、一緒に真剣に仕事をしたり、また余暇を過ごしていくうちにかなり仲よくなるものです。

少ない余暇では、庭でバーベキューをしたり、お酒を飲んだり、手作りの料理で招待しあうといった風になります。バレーボールやジョギングもします。娯楽のない所では、かえって人間関係が親密になる様に感じます。息

UNHCR/L.Taylor



国外で生まれて、初めて自分の国に戻ったモザンビーク帰還民の子どもたち

抜きの時間があまり作れない理由のひとつに、UNHCR内外からの視察の方々と大学等の研究員の来訪があります。日曜・祭日でも大歓迎で、現場と外との意見交換をしたり、結構むずかしい問題を討議したりするのです。

ところで、難民とは、国を逃げ出した人たちなので、誰が、どの政府が責任を持つのか、持てるのかという点が混乱してくるため、UNHCRという中立的機関が必要とされてくるわけです。そして、中立的立場というために、私のような存在(日本人がアフリカなどで仕事をすると非常に中立的になる)は交渉にかり出され、忙しくなります。

ひとつドキッとしたのは、ごく普通のモザンビーク人が「日本という国は、こんなに便利な自動車を作りだしたのだから、人を大切にしたい気持ちはわかる人たちがいるのだらう」と言った事です。これは例えばトヨタのランドクルーザーで、一生もう会えないと思っていた老いた両親に会いに行けたり、トラクターやトラックのおかげで一年以上かかるはずの橋の建設が6か月でできたり、病気の人を遠い病院にまで運ぶ事ができた、という事実から来たのです。つまり、人間のニーズを知り、そのニーズに答えられるという意味です。そう言われてみれば、その姿勢が日本の戦後復興の基本だったと、ハッと思い出したわけです。

私は次はエチオピア勤務で、また日本から遠いのですが、時間のある方はいつでも視察・観光に来てください。

[1996年8月]

紛争の中の難民援助

清水康子 UNHCR ウガンダ

1年半のジュネーブ本部勤務の後、ウガンダに赴任して9か月目に入った。ウガンダは、南部にルワンダから来た難民を、北部にスーダンから来た難民を22万人ほど抱えている。

この大量の難民に対してウガンダ政府は寛容で、広大な土地を与え、農業を推進し、さらには小規模な商いも促進し、将来的には難民が援助に頼らず自立できることを目標にした定住プロジェクトを展開していた。

UNHCRは、土地、道路の整備、井戸の設置などを、民間団体と共に進めている。解決策のないままキャンプに滞在するしかない難民に、援助を一方的に提供し続ける他の多くのプロジェクトに比べるとずっと希望もあるし、おもしろい。

私の赴任したのは、ウガンダ西北部、アルア地区の中心アルアからさらに北50キロ、コボコという小さな町。スーダンとザイルの国境から非常に近い。コボコの事務所は出張所のようなもので、私以外の十数名のスタッフは全員ウガンダの現地職員である。田舎町ゆえ、電気、水道、通信の設備はなく、事務所は自家発電と無線に頼るしかない。ここで、私たちのチームの最大の任務はスーダンから戦禍を逃れて「一時避難キャンプ」に滞在している難民を定住地まで移動させることである。

「コボコの難民キャンプが攻撃され、難民が数名殺された。難民は怯えてコボコの町に流れ込んでいる」。コボコ赴任2週間後、ミーティングのため

にアルアに着くなり、コボコからの無線が追いかけてきた。

情報を集めに走り回った後、すぐにコボコに引き返すと、260名ほどの難民がコボコの町の空き家、軒先に座り込んでいる。難民キャンプの運営を担当している赤十字、町の代表などと協議した結果、定住地への移動を急ぐのが最善だろうと、関係者で一致した。

6月には別のキャンプが攻撃され、この時には2万5000人の難民が同じくコボコに逃れてきた。しかし、この小さな町に難民を滞在させ援助を続けられる許容量はない。その後、難民がひしめく町中で発砲事件があり、難民からも20名以上死者をだした。その結果、軍、政府とも、難民にキャンプに帰ってもらうという結論をだし難民もそれに従ったのだ。

同じ時期、もう一つの定住地イカフェでも民間団体の事務所が銃撃にあい、彼らもアルアに避難した。つまり、6月に3つの難民地区すべてが攻撃にあい、そのうち2つの地区から援助団体が引き上げたのだ。私も、コボコの滞在は許されずアルアに住んで、そこから仕事をしている。さらに、事務所は万一の時に備え身軽にするため、ごく少数を残し現地職員に自宅待機を命じた。

活動も低調になり、食糧、水、医療など、緊急時の人道援助のほかは初等教育が何とか体裁をとどめてい



配給を受けるコボコ(ウガンダ)のスーダン難民

UNHCR/P.Mountzis

る。建設、農業など開発関連の予算は、ほとんどテント、水容器、毛布など救援物資の購入に振り替えられた。定住プロジェクトから一気に緊急援助に逆戻りした感である。

現在、治安回復の見通しは依然たたない。紛争下、銃を持たない人道援助でどこまで意義ある活動ができるのか、その間に答えもないまま1日1日の働きを続けるのである。

[1996年12月]

「いたちごっこ」に過ぎなくても 根本かおる UNHCR トルコ

朝の出勤は、私にとって緊張の一瞬である。閑静な住宅街の一角にあるUNHCRトルコ・アンカラ事務所の前には、周囲の雰囲気似つかわしくない汚れた衣服をまとった人たちが列をなしている。難民資格の申請者たちだ。

申請者の数は、時の政治情勢のバロメーターであり、出勤時の列の長さはいつも気にかかる。例えば、サダム・フセインがイラク北部に侵攻した直後の昨年9月には、イラク北部から逃げてくる人が増えた。トルコ軍が非合法武装組織「クルド労働者党(PKK)」に対してイラク国境地帯で掃討作戦を強化した時には、申請者はぐんと減った。

私の仕事は、難民の資格認定審査。つまり、庇護を求める人々を一人一人インタビューして、国際法に照らして「難民」にあたるかどうかを決定することだ。私を含めて10人余りの法務官が毎日、事務所地下の、逃避行を経てきた人々独特の体臭の漂うインタビュー室で、庇護申請者から迫害の物語を聴いている。

そもそも世間一般では、「難民」という言葉は非常に広い意味で使われるが、国際法上の「難民」の定義はそれよりもかなり狭い。内乱による一般的な治安悪化や極度の貧困だけでは、難民にならないのだ。「イラク北部で女手一つでどうやって子供を育てられると言うんですか」と、幼い子

供を大勢連れてやってきた母親に泣かれても、どうしようもない。

アンカラ事務所では、95年には1796件(3777人)の難民申請を審査した。件数の67%はイラク人、27%はイラン人である。アジアとヨーロッパの両方にまたがるトルコは、陸路で中近東からヨーロッパに抜けるルート上にある。トルコ内に難を逃れて滞在しているイラク人、イラン人となると、何万、何十万いるのかわからない。難民申請する人は、ほんのわずかに過ぎないのだ。

通常は「難民」と認定されると、庇護申請した国での滞在が許可される。しかしトルコは、門戸をフルに開ければどれだけの人々が領内に押し寄せられるかわからないという地政学的配慮もあり、欧米などの第三定住国にすみやかに出国することを条件に、彼らの滞在を一時的に許可しているに過ぎないのだ。我われが申請を却下した場合、彼らは結果として本国送りになるわけだから、考えてみれば恐ろしい仕事だ。仮に本当に迫害にあいかねない人をはねた場合のことを考えると、判断しかねて、夜も眠れないこともある。

私たちが実際に保護している「庇護を必要とする人々」は大海の一滴かもしれない。難民流出国の国内状況が変わらない限り、いたちごっこに過ぎないのではと思うこともある。地道であっても、庇護を必要とする人々の処遇に目を光らせる機関の存在意義は、決して小さくないはずだ。

[1997年3月]

レンガを拾う家族

中川英明 UNHCR ボスニア

旧ユーゴスラビアの崩壊にともなう戦争で、破壊されたサラエボは、95年12月の和平協定で一応、平和を取り戻しました。しかし、まだ銃撃の穴、割れた窓、焼けただれたドアの建物がどの通りにもあり、水道やガ

スも十分に回復していません。建物が修理されて人が住み始めても、元の住民とは違う場合もあり、単に復興したとはいきれない部分があります。

難民が元の生活を取り戻すのは大変なことです。というのは、ボスニア・ヘルツェゴビアでは、故郷に帰ることは、家族や友人を殺したり、我が家を壊して荒らした人たちの隣に住むことなのです。戦争は、破壊や地雷よりも人々の心に敵意と憎悪を植えつけました。

元前線の村を訪れた時のことです。私は、瓦礫の山から使えそうなレンガを拾っているある難民の家族に出会いました。その人たちは、自分の村が敵となった民族に支配されてしまったので、難民キャンプに逃れました。しかし、屋根を直せば元の家に住めることが分かり、家に戻る決心をして、UNHCRから屋根を直す材料をもらい、修理を始めました。

そうして、ようやく、雪が降る前に完成にこぎつけたのです。ところが、明日から元の家に住めると喜んだその前夜、何者かによって家が爆破されて、瓦礫の山となって、里帰りの計画は露と消えたのです。もちろん、彼らは落胆しているでしょう。それでも、厳冬の中で、もくもくとレンガを拾い続けています。

平和実施部隊が駐留していてもこのような暴力がまかりとおるのだから、平和は遠い、と悲観するのは簡単です。でも、私はこの難民家族に希望を感じました。

[1996年12月]



UNHCR/A.Hollmann

Update

世界各地の 難民状況

詳細はインターネットの
ホームページをご覧ください

<http://www.unhcr.or.jp>

アフリカ大湖地域 ルワンダ難民の 空輸作戦始まる

UNHCRは、ザイル東部を制圧している反政府勢力「コンゴ・ザイル解放民主勢力連合（ADFL）」の了解を得て、同地域に残っているルワンダ難民を飛行機で移送する準備を開始している。

UNHCRは4月10日、ルワンダ大統領顧問およびADFL代表と帰還問題について協議した。

キャンプに収容された難民約8万人の大部分は、女性と子どもで栄養失調や病気で苦しみ、ルワンダに帰りたいと口々に訴えていた。キャンプでは、4月初めのピーク時に死亡率が1日180人に達したが、4月11日以降は1日100人未満に減っている。しかしコレラが発生し、現地の医療担当官によるとこれまで25人が死亡、326人が発病。患者はキサンガニ郊外の隔離施設に収容された。

4月11日、ADFLの要請に基づき、まずザイルの国内避難民200人が、イリュージン機によってキサンガニからゴマに運ばれた。移送人数は4月14日現在で1500人に達したが、まだ3500人が移送を待っている。空輸は、UNHCR、WFP（世界食糧計画）国際赤十字の協力で実施。

4月17日に開始予定のルワンダ難民の空輸は、コレラ患者の発生のために延期された。計画では最初に幼児80人を運び、順次人数を増やして1日最高1200人を運ぶ予定だ。キサンガニ近郊のルラには、飛行機への搭乗を待つ間ずっとトランジットセンターが開設された。またキャンプからザイル川の対岸にある空港まで難民を運ぶバスも用意された。ゴマからルワンダへの帰還方法は依然、ルワンダ政府と協議中。

一方、ザイル当局者の報告では、ザイル内陸部（空港のあるキサンガニから西南270～320キロ）には今も、6万5000人程度のルワンダ難民が散在。これらの難民はティンギ・ティンギのキャンプから逃れた17万人の一部だとみられ、UNHCRは確認を急いでいる。（97年4月21日現在）

緒方高等弁務官、 旧ユーゴスラビアを訪問

緒方貞子高等弁務官は4月15日～18日の4日間、旧ユーゴスラビアのボスニア・ヘルツェゴビナ、スロベニア、ユーゴスラビア連邦共和国を訪問し、デイトン和平協定後の復興・援助計画の進捗状況を視察した。

訪問中、緒方弁務官は、ボスニア和平履行会議のカール・ビルト上級代表や各国政府の高官と会談し、避難民の帰還問題について協議した。ボスニア北部のブレチコで、帰還民向けのバス便を5月1日に開始し、年内に600戸の住宅を修復する予定。

アルバニア状況

アルバニアでは、南部の都市プロレ市民による騒乱以来、首都ティ

ラナを含むアルバニア全土が混乱状態に陥っている。3月初め以降、隣国のイタリアとギリシアには合計で4万人をこえる避難民が逃れた。

4月15日、国連安保理決議に基づく多国籍軍兵士1200人が、アルバニアに到着。16日には首都ティラナ西方のデュラス港で、食糧援助の積み下ろしが始まった。世界食糧計画（WFP）によると、小麦や豆など約400トンの食糧は、多国籍軍の支援を受けながら、食糧不足の続く町に運ばれる。

UNHCRはイタリア・ギリシアの両政府と緊密な連絡を保ちつつ、アルバニアの状況を見守っている。UNHCRは、両国政府からの要請があれば避難民の庇護申請手続きについてアドバイスし、また食糧不足が深刻となっているアルバニア国内で必要な人道援助を行なう態勢にある。

アフガニスタンで 国内避難民が急増

内戦の続くアフガニスタンでは、1996年9月末に首都カブールを制圧したイスラム原理主義勢力タリバンが、さらに勢力を拡大している。12月にはカブール北方のショマリ渓谷地方を制圧したため、この地方の住民は戦火を逃れてカブールへの避難をはじめた。その数は、UNHCRが1月2日にカブールにチェックポイントを設置して以来14万人をこえ、増え続けている。

多くの避難民は、親戚や友人の家に身を寄せているが、学校やモスクなど公共の建物に寝泊まりする者もいる。UNHCRは、長期にわたる紛争で居住環境が極度に悪化したカブールにおいて人口が10～15%も増えたこと、さらにカブールにとって重要な食料供給地であるショマリ渓谷から人々が逃げ出すような事態になったことを憂慮している。

一方、アフガニスタン全土の避難民総数も、昨年末から50万人をこえている。

ザイルに空輸される高タンパクビスケット。



UNHCR/D. Endres

Campaign Report/Information

東海銀行の 社会貢献活動

3月21日、東海銀行および同銀行の「国際愛の口座」加入者と「国際愛の送金サービス」利用者から合計99万1088円の寄付があった。東海銀行は、社会貢献活動としてUNHCRへの支援を続けている。

1991年6月に開始された「国際愛の口座」は、普通預金の税引き後の利息の20%が寄付される口座。「送金サービス」は、振込み手数料を無料で、(社)海外事業関連協議会を通じて直接UNHCR本部へ寄付を送金するサービス。これに、同銀行が同額程度の寄付を加え、年2回UNHCRに寄付を続けている。96年までの過去11回の

寄付の合計は1億7500万円以上にのぼり、旧ユーゴスラビアやルワンダなどの難民援助を支援してきた。

この活動は女性雑誌「コスモポリタン」4月20日号でも紹介された。また、3月28日には、東海銀行と関係会社35社から、使用済みテレフォンカードを集めた収益金として、50万円の寄付があった。

ジャパントイムズ 息の長い募金キャンペーン

3月17日に英字紙ジャパントイムズの「読者の難民援助基金委員会」から、ルワンダ・ブルンジ難民・帰還民支援のために470万円の寄付がよせられた。ジャパントイムズは、毎年、年末にかけて人道援助支援のための募金キャンペーンを行っており、その一部をUNHCRに寄付している。キ

ャンペーンの一環として昨年12月に行なわれた第14回チャリティー・コーポレート・カップ・リレーには50チームが参加した。1985年以来合計7561万円以上が、アフリカとアジアの難民支援のためにUNHCRに寄付された。



12月14日、皇居周辺の千鳥ヶ淵公園からスタートするランナーたち。ジャパントイムズ社提供。

日本財団から 100万ドルの寄付

世界から忘れ去られているイランにいる難民に支援の手を差し伸べようと、「日本財団」(曾野綾子会長)から100万ドル(約1億2000万円)の寄付がよせられた。イランには、アフガニスタン、イラクなどから、198万人の難民が避難している。この中で現在キャンプで支援されていない難民を対象に援助プロジェクトを行なっている。日本財団は、1977年からUNHCRを支援しており、アフガン難民やグアテマラ難民支援などのプロジェクトの実施を支援してきた。

毎日新聞社会事業団、 読者からの寄付を 難民支援に

3月24日に、毎日新聞の東京、大阪、西部、中部の各社会事業団から、アフリカ大湖地域とチェチェンにおける難民援助活動に対し合計530万円の寄付が贈呈された。毎日新聞は1985年から、現地取材チームを派遣して紙面で難民の記事を連載し、読者から寄せられた寄付をUNHCRに提供してきた。



イングーシ国境近くのチェチェン子どもたち(毎日新聞社提供)

論壇



ゲイリー・グート

難民を生み出す原因となる国内外の紛争に、地雷は無差別かつ広範囲

タンでは一般市民二万人が死傷、四十万人が被害を受けた。カンボジアでは三万人、モザンビークでは八千人が手足を失ったと推定される。アングラにも死者は失った人だけで、五千人に達する。一九九二年以降、千九百三十一人が死傷し、四千三百二十四人が負傷したとするイラクの公式記録もある。しかし、実際の各国の記録も異なる。しかし、実際の各国の記録も異なる。しかし、実際の各国の記録も異なる。

難民救済に欠かせぬ地雷の除去

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）は現在、全世界で約二千六百万人の難民・避難民を対象に地雷の除去を行っている。これは、カナダの総人口に相当し、世界で約二百十人一人が地雷や紛争などにより、住み慣れた土地を追われて暮らしていることになる。こうした人々の生活に、さらに深い影を落としているのが地雷の存在だ。先日、東京で地雷に關して政府と非政府組織（NGO）が主催する国際会議が相次いだ。今回の日本の積極的な取り組みは、地雷問題に対する国際社会の努力に政治的注目を集めるうえで貴重な貢献であった。

に使われている。地雷の存在する世界六十二カ国のなかで被害が最も深刻なのは、UNHCRの主要援助対象国であるアフガニスタン、カンボジア、モザンビーク、アングラ、イラクなどの国々で、これら五カ国には合計一千万人の難民と、さらに多くの国内避難民がいる。十五年間内戦が続いたアフガニ

スタンでは一般市民二万人が死傷、四十万人が被害を受けた。カンボジアでは三万人、モザンビークでは八千人が手足を失ったと推定される。アングラにも死者は失った人だけで、五千人に達する。一九九二年以降、千九百三十一人が死傷し、四千三百二十四人が負傷したとするイラクの公式記録もある。しかし、実際の各国の記録も異なる。しかし、実際の各国の記録も異なる。

田畑や宅地として使えない危険地域は広範囲にわたり、経済・社会の発展を妨げている。UNHCRは、地雷が難民・避難民の帰った頃の経済発展にも影響する。そのため、対人地雷の除去を提唱してきた。難民が地雷を恐れて安心して帰還できない地域や他の国際・現地機関が地雷除去をしない地域で、安全な帰還路の設定や修繕（付いた地雷にかかわる各計画や国内外の機関が、地雷除去活動を調整し、それぞれの人道、社会、経済援助活動に取り入れるよう呼びかける）決議がなされた（決議第三項）。またこの年、国連の人道問題と平和維持新動局に国連地雷担当所が設置された。UNHCRは国連決議の精神に基づいて地雷担当所と協力しつつ、国際機関やNGOに共通の対人地雷

除去計画の策定を自覚している。結方西子国連難民高等弁務官は、地雷問題について予防、対応、解決という三つのアプローチを提唱している。その中でもUNHCRが強調しているのは主に以下の点である。

①対人地雷の製造、販売、輸送、利用の全面禁止を保護国と帰還地での経済活動、危険地域の調査、専門家による訓練を通じて現地の対応力を高める（UNHCRの活動が地雷で被害を受ける地域を対象に、資金調達と地雷除去などを支援する効果的な国際体制を確立する（本治療）がの治療と競争・難民の帰還）、リハビリ、カウンセリングを実施し、地雷の被害者の社会復帰を助ける。日本が官民ともに、地雷の除去と禁止に向けた国際的な断固とした政治的意志づくりに、重要な役割を果たすことを切望する。（UNHCR駐日代表目録、原文は英語）

主張・解説

ボーイスカウト、難民支援を開始

創立75周年を迎えた(財)ボーイスカウト日本連盟は、記念事業の一環として、難民支援活動への取り組みを開始した。記念事業は、来年3月末まで「視野をより広く“Looking Wider”」をテーマに、地球の環境保全や世界平和をめざして展開される。世界レベルでは、95年に世界スカウト機構とUNHCRが難民救援活動の協力を柱とする覚え書きを交わした。

4月13日、同連盟のボーイスカウト会館で記念事業オープニングセレモニーが開かれ、UNHCRの資料や募金箱を積んだ3台の車両(ローバージャパン社提供)が全国キャラバンに出発した。各地の団・地区で街頭募金を行なう予定。キャラバン終了後には、このうちの1台がUNHCRへ寄贈される。また、(社)ガールスカウト日本連盟のピースパック・プロジェクトにも協力する。



「全国キャラバン」の出発式。写真提供:(財)ボーイスカウト日本連盟

読む資料・見る資料

さしあげます

季刊誌
「難民 Refugees」—— 難民問題の現状と保護・援助のあり方をめぐる情報誌。
特集には難民保護と国際社会の対応、人道援助活動をめぐる将来の展望など、各層の視点を紹介します。

パンフレット
1 難民問題のあらまし—— 難民問題の現状、問題解決のための対処とUNHCRの活動
2 難民女性とは—— 難民の8割をしめるのは女性と子ども。暴力の犠牲となりやすい女性たちの実態を取り上げます。
3「リーフレット」—— UNHCRの活動や難民問題の解決方法などを、イラスト入りで簡単に紹介しています。

「わたしたちの難民問題」—— 大学生などUNHCRの若いボランティアが中心となって高校生向けにつくった入門書。（「僕たちの難民問題」改訂版）。

「難民問題の手引き」—— 「難民問題の現状」「地域別にみる難民問題」「UNHCRの活動」などを教師向けにまとめました。
サイズ変形A5版

「難民の子どもたち」—— どうして難民になったのか、逃げる途中でどのような経験をしたのか、キャンプではどんな生活を送っているか、そして将来の夢など、子どもたちの声が聞こえてきます。世界の難民のうち半分を占めるのは子どもたちです。小学生から高校生向けのカラー冊子（20頁）。

1. ポスター 2種類 —— 世界の難民の子どもが描いた絵画から、アフガン難民（12歳）とスーダン難民（17歳）の作品2点を選んでポスターにしました。
サイズA2（42×59cm）
2. ポスターセット —— 難民地図、UNHCRや難民などについての説明と写真で構成したセット。
10枚一組。サイズA2（42×59cm）

UNHCR 早わかり
UNHCR早わかり（最新版1997年2月発行）
UNHCRの概要

ニュースレター
UNHCR News（現在の難民の状況とUNHCRの援助活動）

募金箱 —— 難民援助の募金にご協力ください。
ボール紙製 8.5×18×13cm
詳しくはお問い合わせください。

お貸しします

展示用パネル —— 文字、写真パネル、世界難民地図を合わせ20枚が一組です。（68×47cm）
貸し出し希望期間、使用目的、主催者をお知らせください（ご要望が多いため、2ヶ月前にはお申し込み下さい）

ビデオテープ
1（日本語吹替え版・字幕版）
ほんのちょっと変えてみよう（14分）
2 日本語吹替え版）
世界の難民はどこに（95（19分） 難民女性（13分）

お知らせ

UNHCR駐日事務所はホームページを開設しています。ぜひご利用ください。

<http://www.unhcr.or.jp>

お問い合わせ先

UNHCR 駐日事務所 広報室

〒107 東京都港区赤坂 8-4-14

TEL03-3475-4882

FAX03-3475-4884

資料や募金箱は、基本的に無料です。ただし送料と資料枚数の多い場合はコピー代がかかります。広報室宛に、ご質問も含めて官製はがきでお申し込みください。できる限り着払い（宅急便または郵便小包）をお願いいたしますが、ご無理な場合、送料分の切手を、資料受け取り後、同封の受領証と共に広報室宛てにご返送ください。

UNHCRニュース NO.3

1997年5月

発行

UNHCR駐日事務所 広報室

郵便振替

口座番号: 00130-4-59734

加入者名: UNHCR